ちゃんがおられたのですか」と声をかけられました。

何日も汽車に揺られ、病後の主人はヘトヘトになって、コロ島に到着しました。何日費やしたか忘れてしまいました。

声も出なくなり、骨と皮だけの三男を見て、乗船係の人に「この子は置いていって下さいよ。どうせ駄目なんだから。もう一人乗せられますからね」と言われたが「私たちの食糧、一人分減らしてもらっても結構ですから」と何度も頼んで、やっと了解してもらい、乗せてもらえました。生きている子どもを置いて行けるものですか。これが“敗戦”というものでしょうか。

何日、船に乗っていたのかも忘れてしまいました。やっと、佐世保に到着しました。検疫の人たちが入って来て、検温器のようなもので肛門から便の検査です。三日間たった後、やっと私たちに許可が下りて下船しました。まだ、半数の方たちが残されていました。

あまりの感激に、主人は卒倒してしまいました。

上陸地点では、何列にも並んで座らされ、頭からDDTを真っ白になるまで振りかけられました。やっと頂いた食事は、麦飯にいものつるの入った雑炊。その、おいしかったこと、今でも忘れられません。

銀行預金通帳、郵便貯金通帳、簡易保険証書、生命保険証書などは、ハルピンで失って何もありません。

「上陸したら一人千円もらえる」と船の中でうわさされていましたが、実際は一銭も頂けませんでした。わずかに日本円をおしめカバーに縫い込んでいましたので、新円と換えてもらいました。のちに生命保険は、調べて解約して頂きました。そのほかのものは駄目でした。

▽再スタート

昭和二十九年九月二十九日、私たちの再出発の日です。

息子の出世を夢見ていた両親の元へ、ボロボロの服を着て、空き缶をぶら下げて帰ったのですから、両親の驚き、嘆きは大変だったと思います。

主人は、早速、会社へ報告。学校の手続きも必要です。長女はもう一度六年生に、長男も四年生に編入、次男は遅ればせながら一年生に編入させて頂きました。三男は、衰弱が激しいものの、御飯を喜んで食べていました。

過去一年間の習慣で、一組ずつの